

研究ノート

「わかりあえる日本語」の構築

—クルド人コミュニティにおける日本語意識調査から—

Establishing Mutually Understandable Japanese (Wakari aeru Nihongo):

An Awareness Survey Conducted Among the Kurdish Community Regarding Japanese Language Learning

片山 奈緒美 (Naomi KATAYAMA)

筑波大学大学院人文社会科学研究科 博士鋼後期課程

2006年の総務省「地域における多文化共生推進プラン」では、地域における多文化共生の意義として〈国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく〉地域づくりが挙げられた。こうした地域づくりを推進するには、東京都杉並区のネパール人、大阪市や神戸市のベトナム人など、多様な背景を持ち独自のコミュニティが形成される外国人住民集住地域それぞれの特徴を考慮することが重要だろう。

多文化共生を進めるためのコミュニケーション方策「わかりあえる日本語」(片山 2018)は、外国人住民と日本人住民の〈接触場面の産出・増加〉と〈コミュニケーション手段の確立〉、〈互いに相手の存在を認め、コミュニケーションをとりとうとする動機付け〉の3点が影響しあうことで相互理解が進むという考え方である。本稿はこの考え方にに基づき、地域ごとに異なる特徴を持つ外国人集住地域における多文化共生に必要な要素を検討した。

まず、埼玉県の JR 蕨駅付近(通称:ワラビスタ)に集住するトルコ系クルド人コミュニティで、日本語習得状況や日本語学習方法、日本語が必要だと感じる場面などについてアンケート調査を行った。その結果を「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」(文化庁 2001)と比較し、ワラビスタにおけるトルコ系クルド人に必要な日本語支援(コミュニケーション手段の確立)や日本人コミュニティとの交流の意欲(動機付け)など、「わかりあえる日本語」構築のための要素を分析した。

In its 2006 multicultural co-existence promotion plan for communities, the Ministry of Internal Affairs and Communications emphasized the significance of regional multicultural co-existence to create communities in which people of different nationalities and races could acknowledge their cultural differences, build equal relationships, and live together as members of regional society. To promote the creation of such communities, it is important to understand the characteristics of each community in which foreign residents live. In these communities, people of various cultural backgrounds create unique communities (such as the Nepali community in Suginami, Tokyo, and Vietnamese communities in Osaka and Kobe). Based on the communication method for multicultural coexistence that employs mutually understandable Japanese (Wakari aeru Nihongo) (Katayama, 2018), the author considers that mutual understanding can be promoted by 1) creating and increasing opportunities for contact between foreign and Japanese residents; 2) establishing communication methods; and 3) motivating foreign and Japanese residents to make acquaintance with and communicate with each other. Based on this idea, in this paper, the author seeks to identify the necessary elements for cultural co-existence in communities for foreign residents with regional differences. First, the author conducted a questionnaire survey in a Turkish Kurd community near JR Warabi station in Saitama

Prefecture, an area that is known as Warabistan. The respondents were asked about their Japanese language acquisition levels, learning methods, and situations where they consider learning the Japanese language is necessary. By comparing the results of the questionnaire with those of the survey conducted by the Agency for Cultural Affairs in 2001 on the awareness of foreign residents in Japan regarding the Japanese language, the author analyzed the necessary elements for the establishment of mutually understandable Japanese (Wakari aeru Nihongo) such as Japanese language support for Turkish Kurds in Warabistan (establishment of communication methods) and willingness to communicate with the Japanese community (motivation).

キーワード: 「わかりあえる日本語」 多文化共生 相互理解 外国人集住地域 トルコ系クルド人
Keywords: Mutually Understandable Japanese (Wakari aeru Nihongo), Multicultural Co-Existence, Mutual Understanding, Foreign Resident Communities in Japan, Turkish Kurds

はじめに

埼玉県川口市と蕨市の市境にある JR 蕨駅の周辺(通称:ワラビスタン)には、約1,200~1,500人のトルコ系クルド人が集住する。トルコ国籍者は日本の観光ビザを取得しやすいことから1990年代から来日後定住する人々が出始め、黎明期の定住者が家族や友人をトルコから呼び寄せて独自のコミュニティを形成し、いまなお新しい定住者が増加中である。彼らはクルド民族であることを理由にトルコで迫害や差別を受けたとして日本で難民申請をしているが、2019年3月現在、日本におけるトルコ系クルド人の難民認定者はいない。その結果、在留資格を持たない不法滞在者となって入国管理局の施設に収容されるか、収容は免除されるが日本での就労と居住地外への移動を禁じられた「仮放免」者として長期間滞在を続けている(中川2001、中島2019、ロイター2016)。

ワラビスタンのトルコ系クルド人(以下、クルド人)はゴミ拾いやパトロールといったボランティア活動を通じて地域社会に貢献しようとしている(日経ビジネス2016、毎日新聞2017)が、藤林(2017)によると「治安悪化や生活習慣への違いへの懸念から地域住民との間でトラブルが生じる例も少なくない」。日々の生活におけるトラブルを回避するには地域社会のルールをクルド人住民側に伝えることが必要であるが、実際にトラブルが起きている現実から、両者のあいだに十分なコミュニケーションが形成されていないと考えられ、ワラビスタンにおける多文化共生のための課題は多いといえる。

一方、多文化共生社会を構築し、異なる言語や文化を持つ者が相互理解を進めるには、コミュニケーションの手段としての言語が欠かせない。日本人住民にとってトルコ語やクルド語はマイナー言語であり、ワラビスタンにおいて日本語をコミュニケーション言語とするのが現実的だろう。クルド人住民が日本語の話し言葉や書き言葉をそれぞれの程度習得しているのかを調査した研究は管見の限り見あたらず、ワラビスタンにおける多文化共生の実現には、まずクルド人の日本語習得状況や日本人住民とのコミュニケーションへの意識について調査する必要があると考えられる。

1. 「わかりあえる日本語」の概念と研究目的

(1-1) 先行研究

日本における接触場面の言語として、近年、災害時や観光分野などで「やさしい日本語」の使用が広がっており、外国人住民や観光客などとのコミュニケーションに一定の役割を果たしている。野田(2014)はこの「やさしい日本語」を「現実のコミュニケーション」という観点から捉え直し、語彙や文法が平易な「やさしい日本語」の使用は日本語話者に負担を求めることになると述べた。これは、コミュニケーションにおける「やさしい日本語」の限界の指摘とも言えるだろう。

さらに野田は、平易な日本語の使用だけではなく、情報伝達のための面を考えて身振りや図表、イラスト、情報の取捨選択などに目を向けたよりユニバーサルな日本語コミュニケーションを考える必要性を論じた。しかし、これらの動きは外国人と日本人住民のあいだの日本語コミュニケーションの手段を論じるに留まり、両者の相互理解やコミュニケーションを取るための動機への言及が弱かった。

Gehrtz 三隅(2017)は、多文化共生の町づくりによる「徳島型の移民社会」の推進には徳島という一地域が抱える問題を検討しつつ、地域の日本人住民に対話を通して異文化を受け入れる心を根づかせることが重要だとした。さらに Gehrtz 三隅(2018)では、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の保障と同時に「やさしい日本語」の使用など受け入れる日本人側を対象とした「新たな日本語教育」の必要性について述べた。つまり、多文化共生社会の構築には外国人側と日本人側の双方へのはたらきかけが必要であり、外国人側に日本語習得や日本文化への理解を求めるだけではなく、日本人側にも外国人住民について理解を深め、受け入れる態勢づくりが欠かせないと考えられる。

また、文化審議会国語分科会で報告された「分かり合うための言語コミュニケーション」(文化庁 2017)でも、コミュニケーションの在り方として「互いの異なりを踏まえた上で、情報や考え、気持ちなどを伝え合って、共通理解を深めていく」ことを重視した。そして、国語としての日本語でも、互いに異なりを持つコミュニケーションの参加者が情報や気持ちを伝えあった後に達する共通理解に着目すべきだと述べた。これはコミュニケーションにおける相互理解の重要性に通じると考えられるが、やはりコミュニケーション参加者の動機については検討していない。

(1-2) 「わかりあえる日本語」の概念

先行研究の概観より、多文化共生社会を進めるには以下の2点が必要だと言える。

- ① 異文化間のコミュニケーション手段の確立
- ② 接触場面を確保し、相互理解を進める

本研究は以上の2点に加えて、多文化共生社会の実現にはコミュニケーション参加者の動機付けが欠かせない考える。動機付けがないと、異文化間のコミュニケーションは負担が大きく、継続したコミュニケーション形成が期待できないためである。そのため、本研究は日本において多文化共生社会を進めるためには、言語コミュニケーションの手段と接触場面の確保に加えてコミュニケーションの動機付けが必要とした日本語コミュニケーションのありかた「わかりあえる日本語」(片山 2018, 2019)を構築することが重要と考える。

片山 (2019) によると「わかりあえる日本語」は図1のように図示される。

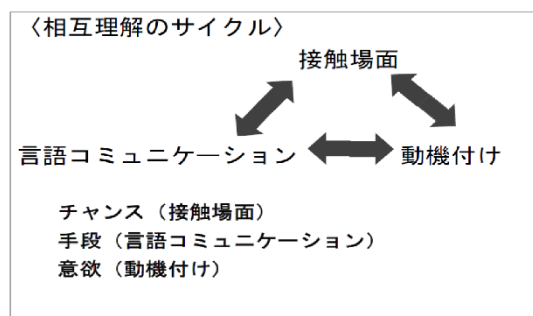


図1 「わかりあえる日本語」の相互理解のサイクル (片山 2019, p.19)

図1が示すように、言語コミュニケーション(手段)が存在し、接触場面(チャンス)が確保されて、異文化間で相手に何かを伝えたい、または相手から何か情報を得たいといった意欲(動機付け)があれば〈相互理解のサイクル〉が効果的に循環し、異文化間の相互理解が進むだろう。この場合のコミュニケーション手段としての言語は日本語環境では日本語や「やさしい日本語」が中心になるが、相互理解の過渡期においては外国人住民の母語や日本人住民と外国人住民の双方が理解できる言語(英語など)を使用する場合もあると思われる。

ワラビスタンに居住するクルド人はトルコ語話者かクルド語話者、またはその両方である。このようにある地域の外国人住民が日本人にとって馴染みの薄い言語の話者である場合、必然的に日本人住民とのコミュニケーション言語は日本語になるだろう。

本研究ではワラビスタンのクルド人コミュニティを調査対象とし、ワラビスタンで多文化共生社会を進めるための「わかりあえる日本語」構築に必要な要素を明らかにしたい。

(1-3) 日本在留外国人を巡る動き

ワラビスタンにおける多文化共生について検討するにあたり、日本における在留外国人を巡る動きについて触れておきたい。

2019年4月、在留資格〈特定技能〉を新設した「改正出入国管理法」が施行された。外務省ホームページ「特定技能の創設」、毎日新聞(2019)、みずほ総合研究所(2019)などによると、新設された在留資格〈特定技能〉は人材不足が深刻な14業種を対象に技能や日本語能力について一定の条件をつけ、

外国人に日本での単純労働を含む就労を認めるものである。施行から 5 年間で約 34~35 万人の外国人労働者の受け入れが見込まれている。

この外国人労働者の大量流入時代を迎えることで懸念されるのは、彼らの在留を本当に管理できるのかという点である。就労先が変わったり、在留が認められた期間を超過してオーバースティになった外国人労働者を所轄する行政官庁がどこまで把握できるのかについて現時点では不透明である。

2019 年 6 月には「日本語教育の推進に関する法律」が公布、施行され (文化庁 2019)、外国人や海外にルーツを持つ人が日本語教育を受けることについて国や行政が負う責任が明らかにされた。今後、労働力不足を背景に増加する外国人住民が日本語習得のための支援を受けやすくなると期待はできるが、現時点では日本語教育的視点の支援に関する基本理念が定められているにすぎない。また、すでに日本国内に長く在留している外国人およびその子どもたちや、特定の国籍や言語の外国人が集住する地域が抱える問題を解決するには、基本理念よりも個別の対応が必要なケースもあるだろう。

本研究で扱うワラビスタンのクルド人は、在留を認められた期間を超過したオーバースティの人々が狭いエリアに集住している。彼らの言語や生活、周辺の日本人コミュニティとのコミュニケーションについて調査することで、将来的に大量流入する外国人労働者がオーバースティになったり、同国人が集住してコミュニティを形成した場合に起こりうる問題を予測することができるだろう。

(1-4) 研究の目的

(1-2) で述べたように、ワラビスタンにおいて「わかりあえる日本語」を構築するには、言語コミュニケーション (手段) と、接触場面 (チャンス)、異文化間で相手に何かを伝えたい、または相手から何か情報を得たいといった意欲 (動機付け) が必要である。しかし、管見する限りワラビスタンのクルド人の日本語習得状況を調査した研究は見あたらない。

ワラビスタンは埼玉県川口市と蕨市の市境付近に位置するが、経済面や言語面の不安から親族や友人どうしがかたまって居住する傾向が強いクルド人は、多くが川口市側に居住しているとされる。川口市統計書に記録がある 2005 年から 2018 年のトルコ国籍者の住民数をグラフ化すると (図 2)、2013 年からトルコ国籍者の住民が増え続けていることがわかる。そのうちクルド人が占める割合は不明だが、相当数を占めるものと推測される。

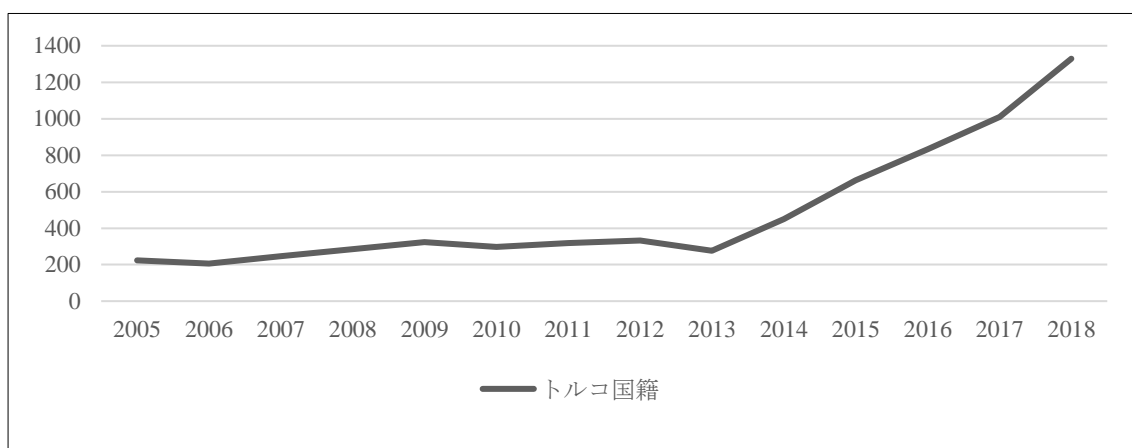


図 2 川口市トルコ国籍者住民数 (川口市統計書第 2 章 22 表から筆者作成)

川口市では市役所に週一日トルコ語の通訳を配置するなどして、増え続けるトルコ国籍者に対応しているが、通訳を介して行政サービスを受けられるトルコ国籍者は、あくまでも在留資格を持つ人々のみである。クルド人の場合、行政サービスを享受できるのは難民申請中で〈特定活動〉ビザを取得できた人など、全体のうちの一部にすぎない。また、川口市のホームページ内の「日本語教室」ページによると、市内には 19 カ所の市公認の日本語教室があるが、ワラビスタンにあるのは支援者による私設のクルド人向け日本語教室のみである。ワラビスタんに 1,200~1,500 人ものクルド人が長く居住していても、日本語教育面での公的支援から漏れていることがわかる。

本研究はこうしたワラビスタンのクルド人を対象にした日本語習得にかんするアンケート調査結果から以下の 2 点を明らかにすることを研究目的とする。

- ①日本語習得状況
- ②日本人住民との交流への意欲、動機付け

上記の①については他の外国人住民への意識調査と比較することでトルコ系クルド人の特徴を示したい。また、アンケート調査の選択式または記述式の回答から、②の交流の意欲や動機付けを探り、「わかりあえる日本語」の要素を示すこととする。

2. 調査

前章で示した研究目的を果たすため、ワラビスタンの16歳以上のクルド人を対象にアンケート調査を行った。調査期間は2018年8月1日から15日と、2019年3月16日から3月31日の合計1ヵ月間である。筆者が作成した日本語版アンケートをクルド人協力者にトルコ語に翻訳してもらったものをアンケート調査に使用した。調査はGoogle Formを用いて実施し、上記期間にワラビスタンのクルド人から回答を得た。アンケート調査の質問内容は本稿末尾の付録に記載したトルコ語に翻訳する前の日本語版アンケートを参照いただきたい。

合計15の質問の内、一部は「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」(文化庁2001)と同様の質問内容にした。

「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」は、地域の外国人住民の日本語に対する意識を調べるため、全国12地域の日本語教室に通っている16歳以上の在住外国人600人を対象に行われた。この調査結果とワラビスタンでの調査結果を比較することにより、ワラビスタンのクルド人と他の外国人住民との意識の差異が現れると考えられる。

(2-1)ワラビスタンのクルド人のアンケート回答者層[質問(1)~(4)]

アンケートの質問(1)から(4)への回答から、質問に回答したクルド人層は以下のように示される。表1の通り回答者は77人で、内訳は男性が37人、女性が40人である[質問(1)]。

表1 質問(1) 性別

男性	女性	合計
37人	40人	77人

年代は16~19歳1人、20~29歳47人、30~39歳22人、40~49歳7人だった[質問(2)]。

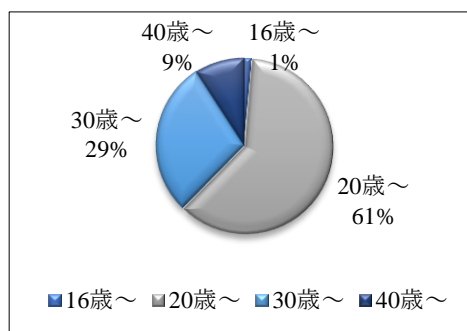


図3 質問(2) 年齢

50代以上の回答者が0人だったのは、Google Formに回答できるスマートフォン使用者が少ないことが一因だろう。また、トルコ語で書かれたアンケートに回答することが困難な層がいたことも考えられる。トルコの言語政策により、1924年に「法廷、学校言語を含む公の場でのクルド語使用が禁止され」(八田2010)た後、2009年にTRT(トルコ放送協会)がクルド語での放送を開始するなどの融和策がとられるまでのあいだ、トルコ国内の公の場でクルド語を使えない時期があった。この間に学齢期を迎

えた年齢層の中には母語であるクルド語を禁じられたことにより学習言語能力が成長せず、トルコ語の習得に苦勞し、トルコ語の書き言葉の習得が充分ではなかった層もいたのではないかと考えられる。その他の原因として、ワラビスタンのクルド人によると、トルコを出国する原因にもなった迫害や差別により、とくにトルコ山間部では子どもが初等教育を終えると通学をやめさせて家の手伝いをさせる家庭が多いため、読み書きが苦手な人々が相当数いると思われる。

アンケート回答者のうち、既婚・未婚の別、子供の有無は図 4 に示すとおりである [質問 (3)]。

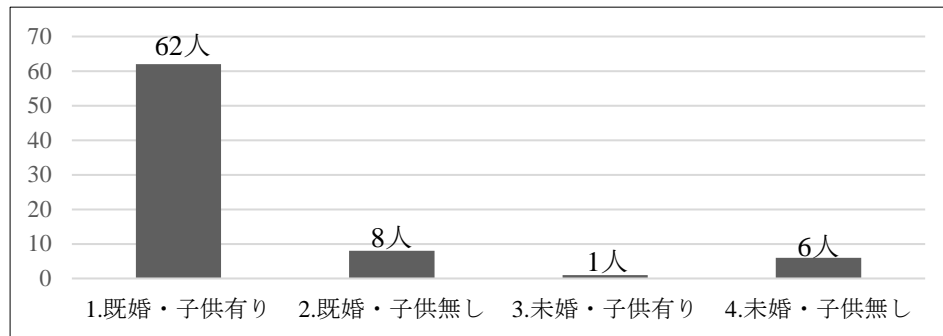


図 4 質問 (3) 結婚していますか・子供はいますか

質問(1)と(3)の結果から、回答者 77 人の内 20 代から 30 代の既婚者が 70 人を占めており、本調査で主にこの層の傾向を示すことができるだろう。

日本滞在歴をつかむために来日の時期を尋ねた質問(4)では、最も長い人で 1984 年に来日していた。2001 年以降 2018 年まではほぼ毎年来日しており、とくに 2010 年から 2016 年に来日が集中していることが観察された[表 2]。筆者がフィールドワーク中に出会うクルド人たちに来日の集中について尋ねると、その時期にトルコ当局の弾圧が厳しくなったからだという答えが返ってきたが、その確認はとれていない。ただし、2003 年のイラク戦争開始とサダム・フセイン失脚をきっかけに、イラク国内のクルド人自治区などクルド人の居住地でイラクやトルコなどからの独立の機運が高まったことが、当局との衝突に繋がり、クルド人社会に何らかの影響を与えている可能性はあるだろう。

ワラビスタンにクルド人が住み始めたのは 1990 年代からとされており、1984 年の来日者と 1996 年の来日者はワラビスタン形成の黎明期を知っている可能性がある。また、16 歳以上である 77 人の回答者の内 3 人が日本生まれと答えており、3 人の家族は少なくとも 16 年以上前から日本に住んでいるといえる。

表 2 質問 (4) いつ日本に来ましたか

1984	1	2000	2010	7	日本生まれ	3
		2001	2011	9		
1996	1	2002	2012	7		
		2003	2013	9		
		2004	2014	5		
		2005	2015	13		
		2006	2016	5		
		2007	2017	1		
		2008	2018	2		
		2009				
1980-1999	2 人	2000-2009	2010-2018	57 人	日本生まれ	3 人
合計						77 人

(セル内左側は来日年、右側は人数)

(2-2) 日本語に対する意識

質問の一部は文化庁の「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」と比較することを目的にほぼ同じ質問をした。ただし、文化庁調査は2001年に実施されたものであり、現在の日本語学習環境とは異なる点があるため、スマートフォンで字を書く、翻訳アプリを使用するなど2001年の調査にはなかった選択肢を適宜追加した。また、就職活動をする機会がほとんどないため、履歴書を書くなどの選択肢は除外した。

日本語の使用頻度を尋ねた質問(5)は図5のような回答が得られた。

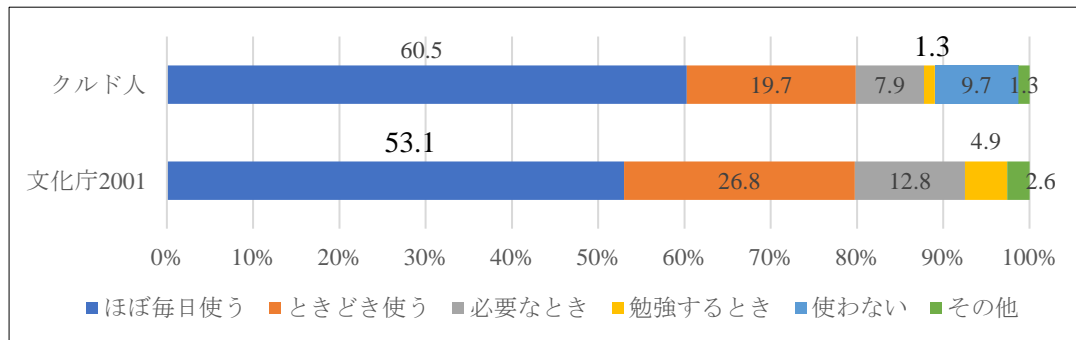


図5 質問(5)日本語の使用頻度 文化庁(2001)との比較

文化庁の調査結果を棒グラフにしてワラビスタンでのアンケート結果と比較した。日本語を「ほぼ毎日使っている」「ときどき使っている」を合わせるとクルド人は80.2%、文化庁は79.9%と、ふたつの調査結果に目立った違いは見られなかった。どちらの調査でも8割程度の人が高い頻度で日本語使用していることがわかった。

実際にどのような言葉を使っているのかクルド人に対して記述式で尋ねたところ、病院や学校、仕事に関係する語彙(病院、風邪、検査、救急車、学校、仕事、現場、商売など)、生活のなかで何かを尋ねたり、用事を足す場所の名前やそのときに使う表現(交番、市役所、郵便局、わかりました、だいじょうぶ(です)、おねがいします、いくら、など)、あいさつの言葉(おはよう、こんにちは、こんばんは、げんきですか、ありがとう、すみません、など)、その他暮らしのなかでよく使うと思われる言葉(だめ、お金、ごはん、パン、子供、水、何時、など)や、感情を表す言葉(かなしい、しあわせ、など)が挙げられた[質問(6)]。

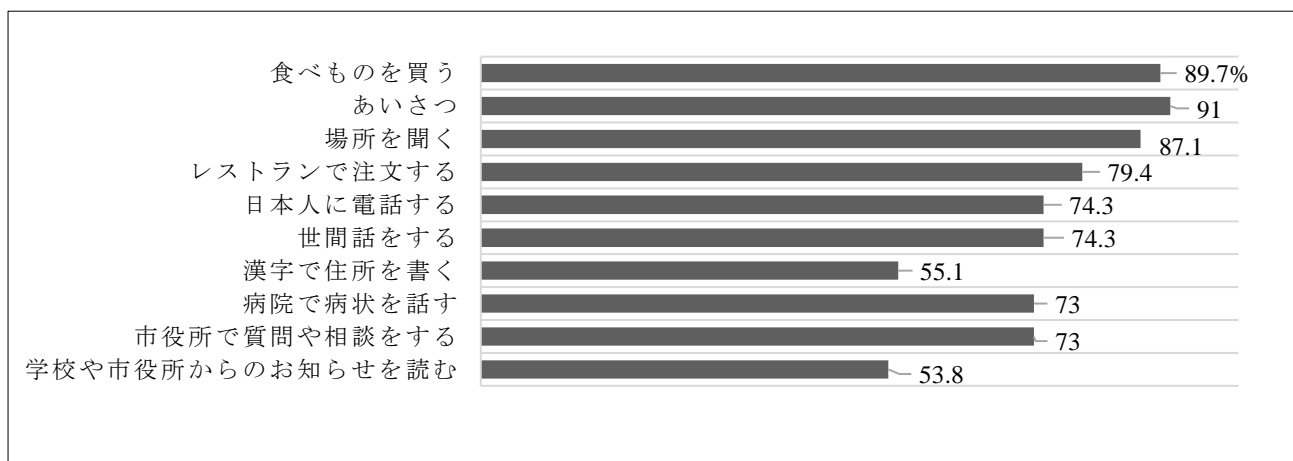


図6 質問(7)日本語でできますか

質問(7)では、ある場面において日本語がどの程度使えるかについて「簡単にできる」「難しいができる」「できない」「わからない」の4択で尋ね、「簡単にできる」「難しいができる」を足した割合を図6に示した。似た質問をしている文化庁の結果(図7)と比較すると、ほぼ同程度の数値が出たが、「漢字で住所を書く」は文化庁調査で65.4%のところ、クルド人は55.1%と10.3ポイントの差が見られた。

この結果からクルド人は平均的な外国人住民と比べて、漢字を書くことへの苦手意識が強いことが観察できた。反対にクルド人「病院で病状を話す」73%に対して文化庁「医者に病状を話す」63.7%、クルド人「市役所で質問や相談をする」73%に対して文化庁「役所などの窓口で質問交渉をする」50.6%と、病院や役所での日本語使用にはクルド人のほうが抵抗を感じていないようすが伺えた。

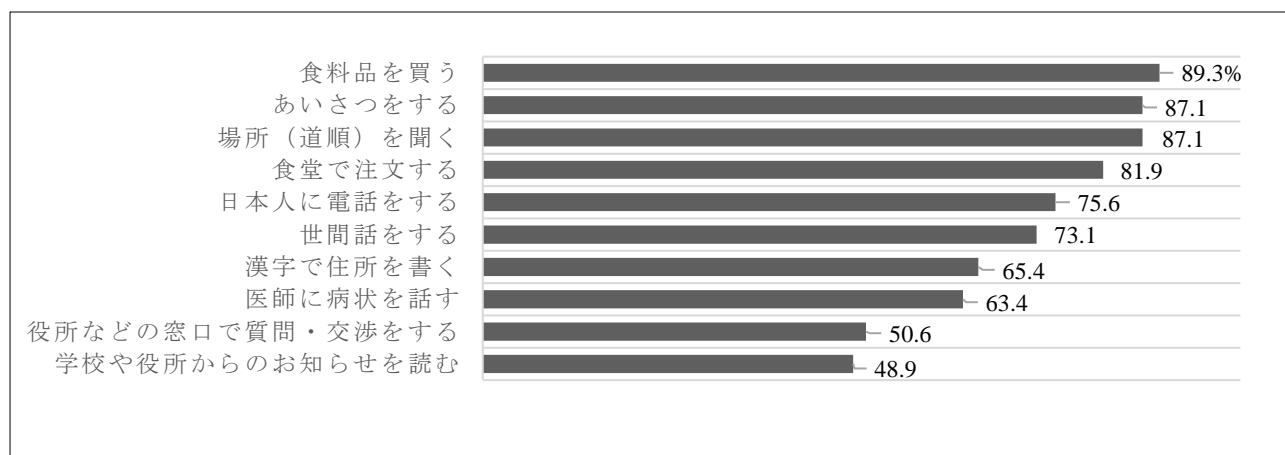


図 7 日常生活に必要な日本語の習得状況 (文化庁 2001)

質問(8)において日本語が分からなくて困ったり嫌な思いをした経験があるかを尋ねたところ、「来日当初は(不快な経験が)あった」「嫌な思いをすることが多い」など、77人中76人が何らかの不快な思いをしたと記述した。

質問(9)では役所や病院などで日本語を使わなければならないときどうしているかについて6つの選択肢を設け、あてはまるものをすべて選んでもらったところ、次のような結果が出た。

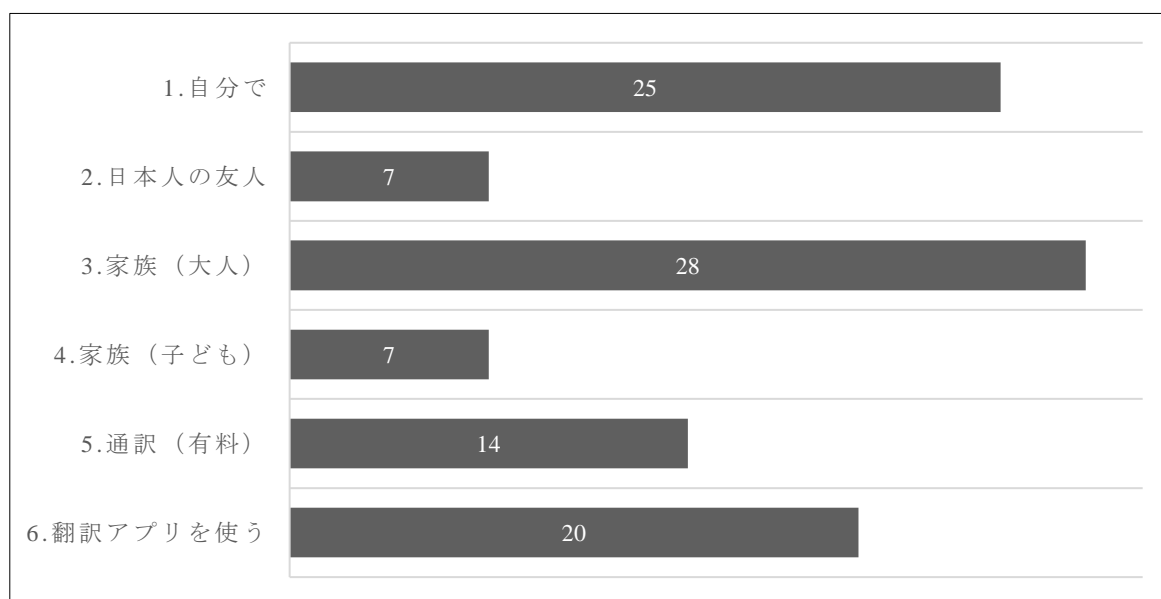


図 8 質問 (9) 日本語を使わなければならないとき、誰に助けてもらいますか

77人の回答者のうち「1.自分で」対応する人が25人、自分より日本語ができる「3.家族(大人)」に頼る人が28人と、全体の30%以上を占めたほか、「4.家族(子ども)」と回答した人が7人となった。これは日本の小中学校に通う子どもがいる家庭は、親よりも日本語を習得していることを示していると思われる。また、「6.翻訳アプリを使う」と答えた人が20人となっており、近年の機械翻訳の性能向上を表していると言えるだろう。

質問 (10) ~ (12) では、日本語を話す・聞く・読む・書く能力について尋ねた。

質問 (10) で日本語をどのくらい話したり聞いたりできるかを質問したところ、図 8 が示すように、〈話す〉〈聞く〉のどちらもほぼ同じ結果となった。全回答者の半数以上が話したり聞いたりする能力はある程度ついていると自覚していることが観察できた。

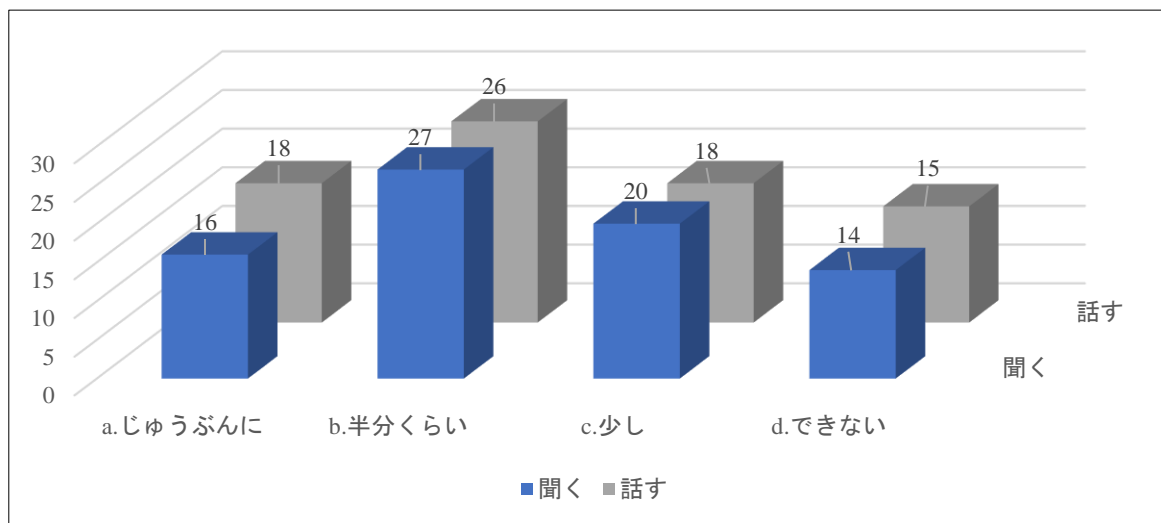


図 9 質問(10)どのくらい日本語を話したり聞いたりできますか

質問 (11) では日本語を読む能力について尋ねた。77 人中 41 人はひらがなが読めるが、漢字が読めて意味もわかるのは 3 人だけに限られた。また、51 人がローマ字を読めると回答しているため、クルド人に日本語の文書を見せるときは、ローマ字を併記すると内容が伝わる可能性があるのではないかと推察される。その一方で「7. (まったく) 読めない」の回答が 29 人だったことから、クルド人にとって日本語の書き言葉のハードルは高いと言えるだろう。

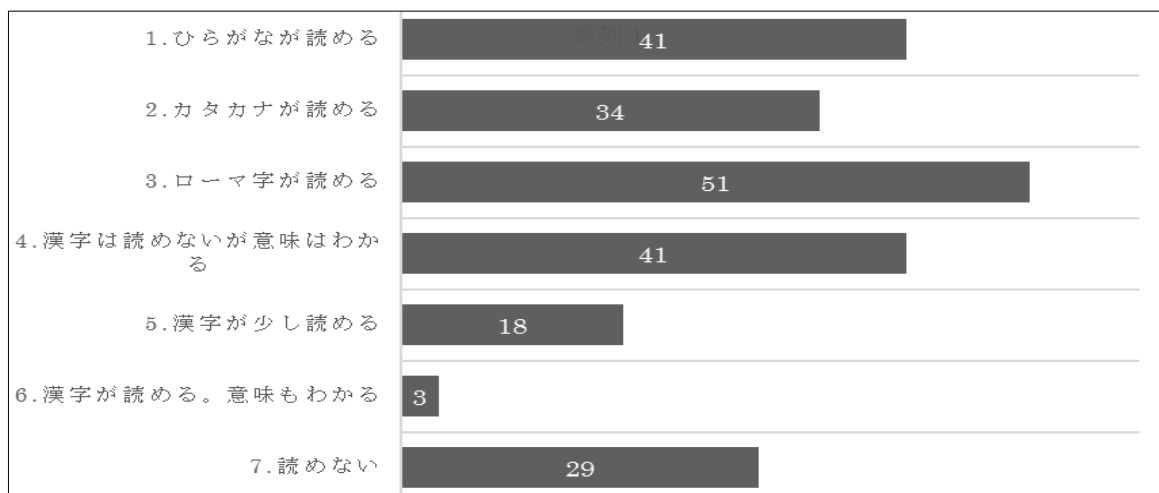


図 10 質問 (11) どのくらい日本語を読めますか

続いて質問 (12) でどのくらい日本語を書けるかについて尋ねた。

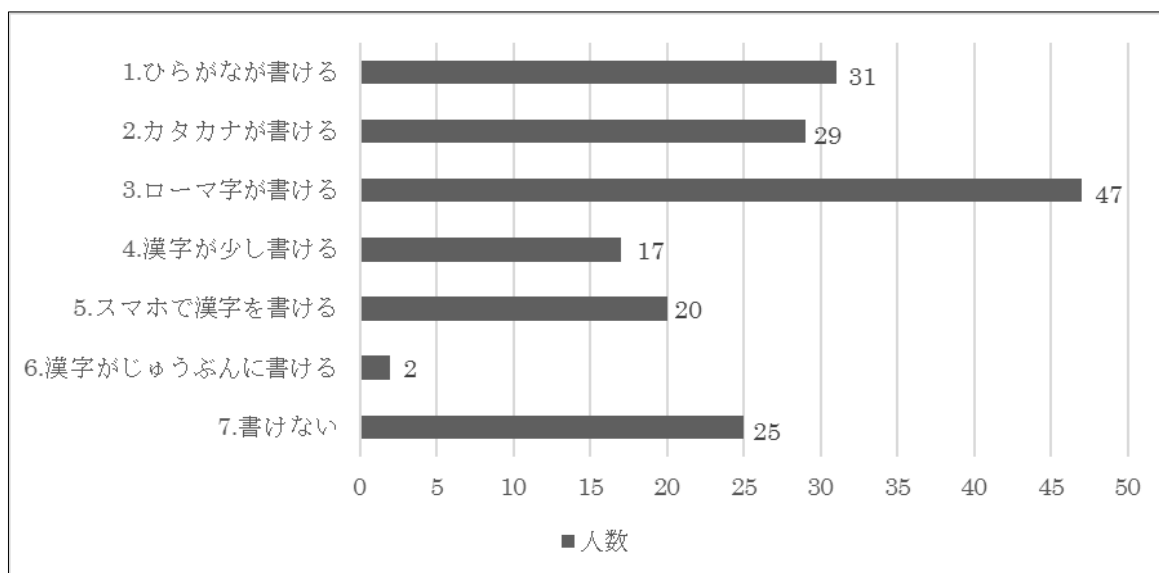


図 11 質問 (12) どのくらい日本語が書けますか

「1. ひらがなが書ける」31 人、「2. カタカナが書ける」29 人と比較すると、「4. 漢字が少し書ける」17 人、「6. 漢字がじゅうぶんに書ける」2 人、「7. 書けない」25 人という回答結果となり、やはり漢字を書くことに苦手意識があるようすが観察された。また、「3. ローマ字が書ける」47 人、「5. スマホで漢字を書ける」20 人という回答があったことから、漢字を手書きすることは困難でもオンラインでの書類記入なら可能な人が一定数いることが推察される。質問 (11) (12) の結果から、役所や学校等で記入する書類にオンラインのものが増えると日本語の読み書きの負担が減ると考えられる。

質問 (13) で日本語を勉強する場所と方法について尋ねたところ、「4. ひとりで (スマホのアプリや本で) 勉強する」がもっとも多く 31 人、次いで「5. 家族やクルド人の友人に教えてもらう」が 25 人、「3. 日本人の友人に教えてもらう」が 17 人となったほかは、「1. 日本語教室」が 8 人、「2. 日本語学校」は 0 人、「3. 日本の小中学校」が 3 人、「8. その他」9 人となった。収入の手段があまりなく日本語学習にお金をかけられないクルド人特有の経済的事情が垣間見える結果となり、「7. 日本語を勉強していない」も 14 人いた。

質問 (14) で 1 年後の日本語習得の目標について尋ねたところ、次のような回答となった。

表 3 質問 (14) 1 年後、日本語がどれくらい上手になってほしいか

1. 日本人と同じくらい会話、読み書きできる	18 人
2. 生活に必要な会話ができる、基本的な漢字の読み書きができる	6 人
3. 日本人と同じように会話できる	8 人
4. 簡単な会話ができる、ひらがな・カタカナの読み書きできる	10 人
5. 生活に必要な会話ができる、少しだけ漢字の読み書きできる	22 人
6. 日本語がうまくならなくてもいい	13 人

簡単な会話とひらがな・カタカナの読み書き習得を目標とする人と生活に必要な会話と少し漢字の読み書きができることを目標とする人が全体の 4 割にあたる合計 33 人を占めたが、日本語の上達を希望しない人が 13 人いた。著者が日本語支援や調査で話をするクルド人たちに話を聞くと、ひらがな・カタカナは習得できそうだと思うが、実際に書類などで目にする文字は漢字が多く、漢字を習得できるとは思えないので日本語の読み書きを学ぶ意欲がわからないと述べる人たちもいた。

質問(15)では日本語の習得が進んだら何をしたいかを尋ねた。ここで記述された回答は以下のようなものである。

- ・日本で就職しようと思います。
- ・仕事を見つけたいです。
- ・クルド人の文化を日本人に伝えたい。
- ・自分の子どもたちの勉強の手伝いをしたい。
- ・大学に行きたいです。
- ・もっと社会活動に参加したいです。
- ・自分自身を表現したいです。
- ・もっと自信を持ちたいです。
- ・ひとりで病院に行きたいです。

これらの回答から、働いたり、大学進学したりといった他人に頼らずに病院に行くといった希望が観察できた。そのほか、「日本語がうまくなっても未来はない」とビザを持たない現状を悲観する記述も見られた。

3. 考察とまとめ

今回は日本語からクルド語に翻訳できる協力者が見つからず、トルコ語に訳したアンケート調査を行ったため、調査協力者はトルコ語を読める層のみとなり、調査の性質上、トルコ語を話せるが読めない層は除外することになった。しかし、本調査結果により、クルド人コミュニティの日本語能力や日本語に対する意識の一端を示せたと考える。これまでクルド人の日本語に関する調査がほとんど行われてこなかったため、意味のある調査結果だと言えるだろう。

調査からは在留資格を持たず収入の手段が極めて少ないクルド人コミュニティならではの特徴が垣間見えた。また、トルコでの迫害や差別により満足に教育を受けられなかった層がいることを感じさせる結果にもなった。

日本語習得状況については、生活言語として頻用する単語（市役所、病院、学校など）やフレーズ（わかりました、おねがいます、ありがとう）は習得できており、「食べものを買う」「あいさつ」などの日本語にはあまり不安はないが、「日本人に電話をする」「漢字で住所を書く」などは苦手とする人が多く、文化庁の調査と比較してもできない人の割合が高かった。高額な授業料が必要となる日本語学校で語彙や文法を学ぶ留学生とは異なり、生活の中で見たり聞いたりした日本語を覚えてきたようすが感じられた。

日本語の四技能を比較すると、クルド人は「話す」「聞く」にはさほど苦勞を感じていないようだ。しかし、「読む」「書く」能力は「話す」「聞く」能力よりも苦手意識があり、特に漢字の読み書きを習得するのは難しいと感じていることがわかった。

日本語習得の目標を尋ねた質問(14)は1年程度の間クルド人が習得したい日本語レベルを示しており、日本語教室等での支援の方向性や内容を組み立てるヒントになるだろう。

これらの調査結果を踏まえると、ワラビスタンにおける「わかりあえる日本語」の要素となる日本人住民との交流への意欲や動機付けは生活や子供の学校、病院などに関する情報のやり取りや、生活の中のちょっとした疑問等を聞ける関係の中に含まれていると言えそうだ。簡単な会話を習得している人も少なくないため、コミュニケーションの垣根を超えるのは日本人側であると言えるかもしれない。

著者が調査や日本語支援で出会うクルド人たちによると、クルド語のみを話す層の高齢化が進行しているという。今後、彼らが日本で年老いていった場合、ビザがないため何の支援も受けられない可能性がある。今後、外国人材が大量に日本国内に流入し、滞在する間にワラビスタンのクルド人のように独自のコミュニティが形成される可能性は否定できない。中にはビザが失効した後も滞在を続ける人々も出てくるだろう。ワラビスタンのクルド人の調査を今後も続け、ますますコミュニティが多様化することで起こりうる問題を予測し、解決の方策を探る端緒としたい。

参考文献

- 片山奈緒美 (2018) 『『やさしい日本語』から『わかりあえる日本語』へ：クルド人住民の接触場面形成の可能性と日本語教育が果たす役割』『多言語社会と言語問題シンポジウム 2018 予稿集』35-36、言語管理研究会 <https://lmtjapan.files.wordpress.com/2018/12/proceedings1.pdf> (2019年1月5日閲覧)
- 片山奈緒美 (2019) 「難民申請者の言語環境に関する研究—在日クルド人の言語バイオグラフィーから

- の記述の試み—』『日本言語政策学会第21回研究大会予稿集』19-21
 川口市(2019)「川口市統計書」第2章22表
https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01020/010/toukei/13/2778.html#h_idx_iw_flex_1_3 2019年6月5日更新(2019年9月26日閲覧)
- Gehertz 三隅友子(2017)「留学生との交流による多文化共生の町づくり—とくしま異文化キャラバン隊2016—」『国際センター紀要・年報』2016、5-14、徳島大学国際センター
- Gehertz 三隅友子(2018)「多文化共生のまちづくり：文化庁『生活者としての外国人』のための日本語教育事業」2017」『国際センター紀要・年報』2017、14-19、徳島大学国際センター
- 総務省(2006)「地域における多文化共生推進プランについて」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000400764.pdf (2019年6月22日閲覧)
- 中川喜与志(2001)『クルド人とクルディスタン—拒絶される民族—』南方新社
- 中島由佳利(2019)「49 在日クルド人コミュニティ—黎明期の「ワラビスタン」と、第1世代—」『クルド人を知るための55章』281-286、明石書店
- 日経ビジネス(2016)「なぜ埼玉県南部にクルド人が集まるのか？」
<https://business.nikkei.com/atcl/opinion/15/221102/042000211/?P=1> (2019年6月22日閲覧)
- 野田尚史(2014)「『やさしい日本語』から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」『日本語教育』158、4-18、日本語教育学会
- 八田洋子(2010)「トルコにおける言語政策とその後の言語政策—ヨーロッパの中のイスラーム的民主主義国家を目指して—」『世界の言語政策 第3巻 多言語社会を生きる』95-118、くろしお出版
- 藤林大貴(2017)「拡大する在日クルド人コミュニティと地方行政の現実」『アジア研ワールド・トレンド』266、20-20、日本貿易振興機構アジア経済研究所
- 文化庁(2001)「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokoyoiku_jittai/zaiju_gaikokujin.html (2019年6月22日閲覧)
- 文化庁(2017)「分かり合うための言語コミュニケーション」文化審議会国語分科会、
http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401904.html (2019年6月22日閲覧)
- 文化庁(2019)「日本語教育の推進に関する法律の施行について(通知)」
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html (2019年11月1日閲覧)
- 毎日新聞(2017)「異郷の隣人 在日クルド人編 1300人が生活、埼玉「ワラビスタン」 学び伝えて地域になじむ」
<https://mainichi.jp/articles/20170124/ddn/013/040/057000c> (2019年6月22日閲覧)
- 毎日新聞(2019)「外国人労働者は本当に人手不足解消の決め手なのか? 「特定技能」半年、見えぬ効果」
<https://mainichi.jp/articles/20191028/k00/00m/040/252000c> (2019年11月1日閲覧)
- みずほ総合研究所(2019)「外国人材の受入拡大と今後の課題 技能実習からの移行が半数程度を占める見通し」
<https://www.mizuho-ri.co.jp/publication/research/pdf/insight/pl190325.pdf> (2019年10月30日閲覧)
- ロイター(2016)「特別リポート：明日見えぬ難民申請者、広がる不法就労の闇市場」2016年8月9日
<https://jp.reuters.com/article/special-report-jp-refugee-idJPKCN10J2JY> (2019年1月5日閲覧)
- 外務省ホームページ「特定技能の創設」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/ca/fna/ssw/jp/index.html> (2019年10月30日閲覧)
- 川口市ホームページ「日本語教室」
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01060/020/4/4970.html> (2019年10月30日閲覧)

付録

「クルド人日本語意識調査」日本語版

わたしはクルド人のみなさんの日本語の勉強について調べています。このアンケートでわかったことを大学の研究に使います。みなさんの秘密は守ります。16歳以上のクルド人のみなさん、質問に答えてください。

- (1) 性別 () 男 () 女 () 答えません
- (2) 年代 16歳～/20歳～/30歳～/40歳～/50歳～/60歳～/70歳～/80歳～/答えません
- (3) 結婚していますか。子供はいますか。
() 1. 結婚しています。子供がいます。
() 2. 結婚しています。子供はいません。
() 3. 結婚していません。子供がいます。
() 4. 結婚していません。子供はいません。
() 5. 答えません
- (4) あなたは、いつ日本に来ましたか(例:2016年)。日本で生まれた人は「1111」と書いてください。
- (5) ふだん日本語を使っていますか。どれかひとつ選んでください。
() 1. はい、ほとんど毎日使っています。
() 2. はい、ときどき使っています。
() 3. はい、買い物など日本語が必要なときだけ使っています。
() 4. はい、日本語を勉強するときだけ使っています。
() 5. いいえ、使っていません。
- (6) よく使う日本語はありますか。あったら、その日本語を教えてください。(例:がっこう/gakko、
びょういん/byoin、おかね/okane、こんにちは/konnichiwa.....など)
- (7) 次の1～10のことを日本語でできますか。どのくらいできるかa～dのなかから選んでください。
a. 簡単にできる/b. 難しいができる/c. できない/d. わからない
- () 1. 食べものを買う
() 2. あいさつをする
() 3. 場所を聞く
() 4. レストランで注文する
() 5. 日本人に電話をする
() 6. 世間話をする
() 7. 漢字で住所を書く
() 8. 病院で医者に病状を話す
() 9. 市役所などで質問や相談をする
() 10. 学校や市役所などからのお知らせを読む
- (8) 日本語がわからなくて困ったり、嫌な思いをしたことはありますか。あったら、書いてください。
- (9) 市役所や病院などで日本語を話したり、書いたりしなければならないとき、いつもどうしますか。
あてはまることをすべて選んでください。
() 1. 自分で日本語を話したり、書いたりする
() 2. 日本人の友人にいっしょに来てもらう
() 3. 自分より日本語ができる家族(大人)にいっしょに来てもらう
() 4. 自分より日本語ができる家族(子)にいっしょに来てもらう
() 5. 通訳(有料)にいっしょに来てもらう
() 6. 翻訳アプリを使う。

- (10) あなたはどのくらい日本語を話したり、聞いたりできますか。
a.じゅうぶんにできる／b.半分くらいできる／c.少しできる／d.できない／e.答えません
() 1. 日本語を聞く
() 2. 日本語を話す
- (11) あなたは日本語をどのくらい読めますか。
() 1. ひらがなが読める
() 2. カタカナが読める
() 3. ローマ字が読める (例 : gakko (がっこう)、eki (えき) など)
() 4. 漢字は読めないが、意味はわかる
() 5. 漢字が少し読める
() 6. 漢字が読める。漢字の意味もわかる
() 7. まったく読めない
- (12) あなたは日本語をどのくらい書けますか。
() 1. ひらがなが書ける
() 2. カタカナが書ける
() 3. ローマ字が書ける (例 : gakko (がっこう)、eki (えき) など)
() 4. 漢字が少し書ける
() 5. スマホやパソコンを使えば漢字が書ける
() 6. 漢字がじゅうぶんに書ける
() 7. まったく書けない
- (13) どうやって／どこで日本語を勉強していますか。
() 1. 日本語教室で (安い)
() 2. 日本語学校で (高い)
() 3. 日本人の友人に教えてもらう
() 4. ひとりで勉強する (スマホのアプリや本などを使って)
() 5. 家族やクルド人の友人に教えてもらう
() 6. 日本の小学校や中学校で勉強した
() 7. 日本語を勉強していない
- (14) 1年後、あなたは日本語をどれくらい上手になりたいですか。あなたの目標に一番近いものを選んでください。
() 1. 日本人と同じくらい会話したり、読んだり書いたりできる
() 2. 生活に必要な会話ができ、基本的な漢字を読んだり書いたりできる
() 3. 日本人と同じように会話できる。
() 4. 簡単な会話ができ、ひらがな・カタカナを読んだり書いたりできる
() 5. 生活に必要な会話ができ、少しだけ漢字を読んだり書いたりできる
() 6. 日本語がうまくならなくてもいいと思っている
- (15) 最後の質問です。もっと日本語を話したり、読んだり、書いたりできるようになったら、何をしたいですか。自由に書いてください。